

# 明治期ミッション・スクール外国人女性宣教師による体育指導： 活水女学校マリアナ・ヤング(Miss Mariana Young 1864-1932)校長の体育奨励

掛水 通子

## はじめに

本研究は、明治期ミッション・スクールの外国人女性宣教師による体育指導を明らかにするための一端として行うものである。明治期ミッション・スクール外国人女性宣教師による体育指導は、わが国の女子教師、女子体育教師が誕生する以前から行われており、女子体育教師前史といえるが、研究すべき点が残されている。

明治期ミッション・スクール外国人女性宣教師による体育指導に関する先行研究として、岸野、秦、掛水等の研究がある。岸野<sup>1)2)</sup>は、各学校史から得た史料の範囲で外国人女性宣教師の体育指導を述べている。秦<sup>3)4)5)</sup>は同志社を中心に、キリスト教主義女子体育の理念と実際を明らかにしている。しかし、同志社以外の記述は学校史の記述によっている。岸野も秦も活水女学校のマリアナ・ヤング(Miss Mariana Young 1864.2.5-1932.6.28)校長については言及していない。掛水は各学校史の記述の範囲と、各学校への郵送調査で得られた史料から、全国の私立女学校、高等女学校の明治期における体育指導者を明らかにした。明治期における私立女学校、高等女学校の最初の体育指導者はキリスト教主義女学校の外国人女性宣教師であり、その後、日本人男子体育教師、他教科と兼任で体育も教えた日本人他教科兼任女教師を経て、1902(明治35)年以後体育を専門とする日本人女教師が現れたことを述べた<sup>6)</sup>。さらに、この記述をもとに、『体育史講義』中の「女子体育の創始者たち<sup>7)</sup>」や、『スポーツと教育の歴史』中の「日本の女性のスポーツと教育<sup>8)</sup>」でも同様の記述をした。活水

女学校のマリアナ・ヤング校長についても、活水女学校学校史の記述の範囲で『明治35年には「新式体操」が有料公開された。』<sup>9)</sup>、『明治35年には活水女学校のマリアナ・ヤング校長は新式体操を有料公開し、市民に対しても体育を啓蒙する役割を果たした。』<sup>10)</sup>などと述べた。

本研究では、活水女学校では、「新式体操を有料公開した」という点を中心として取り上げる。各ミッション・スクールの学校史の中には、外国人女性宣教師による体育指導に関する記述のなかで、「校庭で棍棒体操をしていると門前には市民が黒山のようにたかかって見ていた<sup>11)</sup>」、「明治30年代の運動会では修道女の指導によるダンスが演ぜられ多くの見物人が集まっている<sup>12)</sup>」などの記述がある。しかし、それらは有料ではなかった。今回、有料公開の内容とを明らかにできる新史料を発掘したので、どのような形で有料公開されたのかを明らかにする。さらに、このことを通して、外国人女性宣教師であるマリアナ・ヤング校長の体育奨励を検討する。

## 1 明治期ミッション・スクール

1858(安政5)年7月29日の日米修好通商条約8条によって、キリスト教宣教師の来日が可能となり、アメリカ合衆国を中心として、多くの宗派から外国人宣教師が来日することになった。1873(明治6)年2月19日にキリシタン禁制の高札が撤去され、キリスト教信仰が認められた。米国長老教会に婦人<sup>13)</sup>伝道局が出来たのは、1870(明治3)年のことでフィラデルフィア、ニューヨークおよびシカゴに同じ年に別々に誕生した。在日長老教会ミッションは、1873(明治6)年に初めて独身女性宣教師を受け入れた。

他派でも1870年代に婦人伝道局が出来た。婦人伝道局ができ、女性宣教師が海外伝道を志すことになったことが、日本に多くの女子ミッション・スクールを開校させることになった。1899(明治32)年に私立学校令が制定され訓令12号を発令し、宗教教育を禁止し、1903(明治36)年に緩和されたが、訓令12号そのものは1945(昭和20)年10月まで存在した。

日本の女子ミッション・スクールは、1870(明治3)年に2校設置されていたが、以後10年間で20校以上、プロテスタント・キリスト教だけでも明治期に50校以上設置された。どの学校も当初は、文部省の認可とは無関係な小さな私塾のような形態であったが、次第に、国の認可を受けた学校へと発展していった。

明治期のミッション・スクールについては、小檜山が『女子教育が、プロテスタント・キリスト教のミッションが日本に残した遺産の中で極めて重要なもの一つであることに異論はないだろう。明治初期の二〇年間に創立されたアメリカ系を主とする女子「ミッション・スクール」は日本における女性に対する近代的中高等教育の先駆けであった。<sup>14)</sup>』と述べるように、わが国の近代女子教育史に大きな役割を残した。

## 2 明治期ミッション・スクール外国人女性宣教師像

外国人女性宣教師に関する先行研究では、ミッション・スクールを作ることは海外伝道の中心ではなく、外国人女性宣教師の役割は、本来、あくまでキリスト教の伝道であったとする。しかし、日本では女子教育の受けが良く、女性宣教師の多くはアメリカで学校の教師をしていたから、教育は彼女たちにとって馴染みの深い活動であったため、日本では多くの女子ミッション・スクールが設立されたとみる。小檜山は、「女子教育事業—特に中流の一般家庭の女子を対象とする中等教育以上の教育—は、一九世紀アメリカの海外伝道戦略において決して主流の位置を占めていたのではない。それは、明らかにマージナルなプロジェクトであるべきものであった。

すなわち、キリスト教伝道の最も基本的な方法かつ目的は、神の言葉を述べ伝え、現地の人々による教会をつくることであった。<sup>15)</sup>』と述べる。さらに、『では、なぜアメリカ系プロテスタント・ミッションの婦人教師は普通一般女子教育に多大な努力を注いだのだろうか。むろん、彼女たちは女子教育だけをやっていたのではない。婦人宣教師は多くの場合、婦人救済事業、孤児の養育に関わっていたし、「通いの学校(day school)」と称されたものは、ほとんどの場合、貧民に対する無料の初等教育を意図したものだ。』(中略)元来婦人教育は、婦人宣教師が関わりうるいくつかの事業の一つだったが、日本ではとりわけ受けが良く、比較的容易に発展したため、その受容に応じて、宣教師の側も努力を傾注した、というのが、この問題に対する有力な回答の一つだと考えられるのである。婦人宣教師の多くはアメリカで学校の教師をしていたから、教育は彼女たちにとって馴染みの深い活動であった。彼女たちは自分達の経験の延長線上に異国での伝道の突破口を据え、それが予想以上に日本人に受け入れられた、というわけである。<sup>16)</sup>』と説明する。さらに、アメリカ婦人宣教師の来日の背景を小檜山は「婦人宣教師になった女性たち—特に独身者—は、アメリカで慈善事業に無報酬で没頭できるほど、経済的には恵まれてはいなかったが、宣教師となれば、生活を保障された上、かつ日常的には雇われた人間であることを強く意識しないで、本国アメリカでは自分より一段上の階層の女性がリーダーシップを取る慈善タイプの事業で主導権を握ることができた。<sup>17)</sup>』からと分析する。

宮地は『アメリカン・ボード宣教師—神戸・大阪・京都ステーションを中心に』中の「大阪ステーションの自給と女性宣教師の役割—地域社会との関わりを中心に<sup>18)</sup>」で、1880年代の女性宣教師の役割について、『一八八五年の秋以降、大阪ステーションでは「学校を担当する女性宣教師は一人」という当初の分業プランが復活する。英語、器楽の授業、学校全体の管理、寄宿生の世話<sup>19)</sup>』、『大阪の社会を欧化の嵐が吹き抜けた—一八八〇年代半ば以降の数年間、多くの生徒の目的は外国人女性教師から

英語、音楽、洋裁、西洋マナーなどを学ぶことであった。<sup>20)</sup>』と述べる。

外国人女性宣教師の役割として、キリスト教伝道として教会を作ること、婦人救済事業、孤児の養育、学校では英語、器楽の授業、学校全体の管理、寄宿生の世話、洋裁、西洋マナーなどが挙げられている。女性宣教師に関する研究で、特に体育指導の記述は見られない。

### 3 活水女学校

#### (1) 明治期活水女学校略史

明治期活水女学校の略年表をマリアナ・ヤング校長の略歴とともに後掲表1に示した。表作成には主として『活水学院五十年史<sup>21)</sup>』、『活水学院百年史<sup>22)</sup>』を用いた。その他の出典は表下に注記した。ここでは、前項で述べた事項と関わる事項のみを検討する。

1879(明治12)年11月に、米国メソジスト監督教会婦人外国伝道協会(WFMS Woman's Foreign Missionary Society)から派遣されたラッセル(Miss Elizabeth Russell 1836.10.9-1928.9.6)とギール(Miss Jean M. Gheer 1846.11.3-1910.7)が長崎に到着した。ラッセルは主として学校教育、ギールは宣教に専念することになった。ギールが宣教師本来の任務である宣教に専念したので、ラッセルは校長として学校教育に専念できた。12月1日には一人の女生徒が入学し、12月25日には女兒学校開設の広告を出している。校名を活水と定めたのは1880(明治13)年9月から翌年6月の間である。活水女学校となってからも長い間、県や国の認可のない私塾であった。1899(明治32)年8月の私立学校令は宗教教育を分離した。私立高等女学校になるにはキリスト教を捨てねばならなかったから、活水女学校は高等女学校となる選択はせず、12月に各種学校として設立認可された。予備科40名は他の小学校に転校し、翌年8月の小学校令改正で予備科は復活した。1912(明治45)3月に、高等女学部の卒業生は、専門学校入学者検定規程により高等女学校卒業者と同等以上の学力を有するもの指定された。

初期の学科をみると、1879(明治12)年12月25日の女兒学校開設の広告<sup>23)</sup>では、聖書、英語、日本普通学、西洋、手芸、音楽である。1883(明治16)年のラッセルの発言<sup>24)</sup>では、国語、英語、米国の女学校の課程であり、学力のない女生徒を引き受けることになり技芸部を設置し、手芸、裁縫、機織、料理、小学校の教科、理科を課した。前項宮地の研究の、当時の女生徒が外国人女性宣教師から学びたかった点とほぼ一致する。校則が整理されたのは1887(明治20)年4月になってからで、「科目を大別して三部とす」とし、「邦学部、英学部、技芸部」に分けている。初等科(邦学部、英学部)3年、中等科(邦学部、英学部)3年、高等科(邦学部、英学部)2年、撰修科(邦学部、英学部)年限記載なしで、さらに技芸部がある<sup>25)</sup>。1889(明治22)年にサイモンズ女史が教科課程を編集し、初等科4年、中等科4年、高等科4年、神学科4年となった。1895(明治28)保育三年の幼稚園設置。1901(明治34)年7月の活水女学校規則<sup>26)</sup>改正では、予備科2年、初等科4年、中等科4年、高等科4年、通じて14年を正科とし、その上に神学科4年、技芸科6年、美術科4年、音楽科6年、幼稚科3年となった。1907(明治40)7月に私立活水女学校規則と幼稚科保育規程が改正された<sup>27)</sup>。正科は小学科3年、予備科2年、初等科4年、中等科4年、高等科4年の17年と長くなった。その上に神学科4年、技芸科6年、美術科4年、音楽科5年、幼稚園師範科2年となった。1901(明治34)年7月に比べると、小学科3年が設置され、音楽科と幼稚科が1年ずつ短くなっている。

#### (2) 明治期活水女学校教科課程にみる体育

1879(明治12)年12月25日の女兒学校開設の広告、1883(明治16)年のラッセルの発言、1887(明治20)年4月の長崎活水女学校規則、1889(明治22)年サイモンズ女史編集教科課程には、体育に関する教科はない。

1887(明治20)年4月の長崎活水女学校規則第四章生徒行状心得第八項に「遊歩時間は勉強ス可ラス<sup>28)</sup>」という記述が初めてみられる。遊歩とは散

歩や遊びを意味し、遊歩時間即ち休み時間には勉強しないで遊びなさいということである。

体操運動の奨励、教科に体操が初めて導入されたことが学校規則で確認できるのは、1901(明治34)年7月改正活水女学校規則である。しかし、実際にはマリアナ・ヤングが1897(明治30)年9月に着任し、「着任後長崎の教育のこの分野におけるおくれに着目して、組織的な新式体操を導入することをラッセル女史に語り、賛成を得てさっそく生徒に教えることになった。<sup>29)</sup>」とあるから、1901(明治34)年7月改正活水女学校規則より前に体育は指導され始めていた。1901(明治34)年7月改正活水女学校規則第七章生徒心得第三十六条に「生徒ハ必ず体操運動ヲ怠ルベカラズ 若シ健康上体操運動ヲナスコト能ハサル時ハ校医ノ署名ヲ得テ其欠席セントスル部分ヲ届出ツベシ<sup>30)</sup>」とある。正科のうち、初等科、中等科、高等科に週33時間中2時間の体操が課されることになった。初等科4年、中等科2年までが「普通」、中等科3年以上が「機械<sup>31)</sup>」であった。(高等科には時間が記入していない期もあり、高等科理科冬期は1時間とある。)当時、文部省による尋常小学校では、1900(明治33)年の小学校令改正で体操は1学年は週21時間中4時間の遊戯、2学年は24時間中4時間の遊戯、普通体操、3、4学年は27時間中4時間の遊戯、普通体操であった。1899(明治32)年の高等女学校令による学科は1から4年までの各学年28時間中3時間の体操で普通体操と遊戯であったから、活水女学校の全時間中体操科の時間の割合は少なく、内容にも違いがあった。普通体操は課しているが、遊戯を課さず、高学年に「機械」を課している。1907(明治40)年7月改正私立活水女学校規則では、神学科にも体操普通が課されることになった。

#### 4 マリアナ・ヤング校長の体育奨励

##### (1) マリアナ・ヤングの略歴

マリアナ・ヤングの略歴は明治期活水女学校の略年表とともに表1に示したので、ここでは細部には言及しない。前述したように、小檜山は婦人宣教師の

多くはアメリカで学校の教師をしていたこと、日本では、日常的には雇われた人間であることを意識せずに、本国では自分より一段上の階層の女性がリーダーシップをとる慈善タイプの事業で主導権を握ることができると分析した。マリアナ・ヤングにも教師経験があった。

マリアナ・ヤングは1864(元治元)年2月5日米国オハイオ州メリスヴィル市に生まれ、小学校を終えメリスヴィル・ハイスクールラテン語学科卒業。卒業間際から小学校、卒業後村落学校や小学校に勤務後、1889(明治22)年に25歳でオハイオ・ウエスレアン大学に入学し、1893(明治26)年に29歳で同大学文科を卒業し、バッチュラー・オブ・アーツの称号を得た。在学中も毎年7月と8月は同大学夏期学校教員として勤務した。オハイオ・ウエスレアン大学は1842年にメソジストによって創立された大学で米国メソジスト監督教会と活発な提携をしている。初期には、多くの卒業生が宣教師として海外に奉仕したことにより、「West Point of Missions」として知られている<sup>32)</sup>。卒業後、ウイスコンシン州マリネッチ・ハイスクールでラテン語、ドイツ語、英語を、続いてペンシルベニア州ミードヴィル・アレガニー大学中学部でラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、英語を教授した。

1897(明治30)年9月に33歳で海外伝道に志し、メソジスト監督教会婦人外国伝道協会(WFMS Woman's Foreign Missionary Society)の宣教師として活水女学校に派遣された。当初教科は主として英語を担当した。1898(明治31)年4月にラッセル校長が休暇で帰国する際、34歳で活水女学校第二代校長に就任した。その後、マリアナ・ヤング校長が休暇で帰国する際にはラッセルが校長代理となった。1920(大正9)年3月に56歳で活水女学校第二代校長を辞任し帰国、ボストン大学で宗教教育および社会学を研究、1924(大正13)年6月には60歳でMRE(Master of Religious Education)の学位を取得した。

同年秋には長崎に戻り、福音奉仕者として伝道、幼稚園経営、貧民救済、無料施療所等で地域に奉仕した。1930(昭和5)年3月に義弟急病の報に急ぎ帰国した後、1932(昭和7)年6月28日に68歳で昇天した。

表1 マリアナ・ヤング (Miss Mariana Young 1864.2.5-1932.6.28) 略歴と活水女学校略年表

マリアナ・ヤング (Miss Mariana Young) 略歴			活水女学校略年表
年	月日	年齢	
1864 (元治元)	2月5日	0歳	米国オハイオ州メリスヴィル市生まれ
1879 (明治12)			5月 (ラッセル・42歳) 米国メソジスト監督教会婦人外国伝道協会 (WFMS Woman's Foreign Missionary Society) 海外派遣員を志願 11月 ラッセルとギール長崎到着、ラッセル主として学校教育、ギール宣教に専念 (注1) 12月1日 一人の女生徒入学 12月25日 女児学校開設の広告 9月~翌6月の間 校名を活水と定める
1880 (明治13)			5月 新校舎落成
1882 (明治15)	9月	18歳	小学校を終え、メリスヴィル・ハイスクール入学
1885 (明治18)	5~8月	21歳	小学校教員として勤務
	6月	21歳	メリスヴィル・ハイスクールラテン語学科卒業
	9月~	21歳	村落学校に勤務
	翌4月	22歳	
1886 (明治19)	10月~	22歳	小学校に勤務
	翌8月	23歳	
1887 (明治20)	10月~	23歳	小学校に勤務
	翌3月	24歳	校則整理
1889 (明治22)		25歳	オハイオ・ウエスレアン大学入学 在学中毎年7月と8月同大学夏期学校教員として勤務
1890 (明治23)			3月 サイモンズ女史教科課程編集 (ラッセル・52歳) 休暇で帰国 (ラッセル・53歳) 兼任
1893 (明治26)		29歳	オハイオ・ウエスレアン大学 (注2) 文科卒業 バッチュラー・オブ・アーツの称号 ワイコンシン州マリネッチ・ハイスクールでラテン語、ドイツ語、英語を教授
	~	29歳	
	翌7月	30歳	
1894 (明治27)	9月	30歳	ペンシルベニア州ミードヴィル・アレガニー大学中学部でラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、英語を教授
1895 (明治28)	~1897年	33歳	
1896 (明治29)			保育三年の幼稚園設置 7月 学校の機関誌として「活水女学」 The Kwassui Quartery 創刊 (注3)
1897 (明治30)	9月	33歳	海外伝道に志し、米国メソジスト監督教会婦人外国伝道協会WFMS (Woman's Foreign Missionary Society) の宣教師として活水女学校に派遣される 長崎到着
1898 (明治31)	4月	34歳	活水女学校第二代校長に就任
1899 (明治32)	4月22日	35歳	新しい体操服着用し、カウエンチャペルで体育を公開 (注4)
			4月 (ラッセル・61歳) 休暇で帰国、ヤングに校長ゆずる 8月 (ラッセル・62歳) 再来日 12月 私立学校令 宗教教育を分離 各種学校としての活水女学校設立認可 高等女学校になるには、キリスト教を捨てねばならないから 予備科40名他の小学校に転校
1900 (明治33)			8月 小学校令改正で予備科復活
1901 (明治34)			7月 明治三十四年 七月改正 活水女学校規則
1902 (明治35)	4月26日	38歳	舞鶴座で慈善音楽体操会開催 (注5)
1906 (明治39)			体育館建設
1907 (明治40)			7月 明治四十年 七月改正 私立活水女学校規則並ニ幼稚科保育規程
1908 (明治41)			10月29日 アシュボー兼任
1909 (明治42)			(ラッセル・72歳) 休暇で帰国
1911 (明治44)	7月	47歳	休暇で帰国 ラッセル、校長代理
1912 (明治45)			3月 高等女学部卒業生、専門学校入学者 検定規程により高等女学校卒業者と同等以上の学力を有するもの指定される。
1914 (大正3)	5月	50歳	校長再任
1915 (大正4)			Athletic Association 組織 『Thirty-Fifth Anniversary Bulletin Founded 1879』発行 活水三十五年史 (注6) (ラッセル・82歳) 帰国
1919 (大正8)			
1920 (大正9)	3月	56歳	活水女学校第二代校長辞任
	7月	56歳	帰国 ボストン大学で宗教教育および社会学を研究
1924 (大正13)	6月	60歳	MRE (Master of Religious Education) の学位取得
1924 (大正13)	秋	60歳	福音奉仕者として長崎伝道、幼稚園経営、貧民救済、無料施療所等で地域に奉仕
1928 (昭和3)			12月 活水女学校校則
1929 (昭和4)			『活水学院五十年史』発行 『KWASSUI JOGAKKO 1879-1929』発行 英文の著者はアシュボー
1930 (昭和5)	3月	66歳	善業急病の報に急ぎ帰国
1932 (昭和7)	6月28日	68歳	昇天 (24日手紙整理中、火が洋服に燃え移った火傷による)

(注1) ラッセルとは Miss Elizabeth Russell (1836年10月9日-1928年9月6日)、ギールとは Miss Jean M. Gheer (1846年11月3日-1910年7月)

(注2) オハイオ・ウエスレアン大学は1842年にメソジストによって創立された大学。米国メソジスト教会と活発な提携。初期には、多くの卒業生がmissionariesとして海外に奉仕したことにより、「West Point of Missions」として知られている。(出典 オハイオ・ウエスレアン大学ホームページ <http://www.owu.edu/about.html> 2006年8月6日検索)

(注3) The Kwassui Quartery 年4回発行。大正3年52号あたりから「活水」と改名 当初から高等科中等科の学生が中心になって編輯、大正8年ごろまで継続、ある事情から廃刊

(注4) 新しい体操服着用し、カウエンチャペルで体育を公開 (英文五十年史、活水学院資料室所蔵写真による。)

(注5) 鎮西日報明治35年4月24日によると舞鶴座で慈善音楽体操会開催したのは4月26日。活水学院百年史には3日間開催とある。

(注6) Thirty-Fifth Anniversary Bulletin Founded 1879 (原本) 背表紙 後日作った表紙 Thirty-Fifth Anniversary Bulletin Founded 1879 (原本) 発行日、発行者記載なし。1915年の卒業生の写真があるから1915年発行か。

その他の主たる出典  
・活水学院編、活水学院五十年史、活水学院、1929、p.44  
・活水学院百年史編集委員会編、活水学院百年史、活水学院、1980、pp.58-59 pp.168-172

## (2) 体育奨励

### ①「有料公開」に関する学校史記述

『活水学院五十年史』には、「女史は米国に於てさる大学に於て体育に興味を有し研究しておられたので、来任後此点に早くも着眼して、ラッセル女史の勲奨に基き組織的な新式体操を活水女生に課することにしたのである<sup>33)</sup>」とあり、『活水75年の歩み』にもヤング先生の「新式体操<sup>34)</sup>」の記述はあるが、『活水学院百年史』第二章第三節は表題が「新しい体育」で、体育がまとまって記述されている。

『活水学院百年史』の記述は五十年史によったもので、「ヤング女史は米国に在るとき、体育について興味をもって研究していたので、着任後長崎の教育のこの分野におけるおくれに着目して、組織的な新式体操を導入することをラッセル女史に語り、賛成を得てさっそく生徒に教えることになった。(中略)そこで奨励の意味で1899(明治三二)年四月二二日午後七時から本校講堂で大演習会を開いた。(後略)<sup>35)</sup>」とある。

そして、「この新体操の噂はすぐに全市の教育界の評判となり、各学校競って活水から学ばんとする程の勢になった。当時は講習会を開くこともなかったので、市民に公開してはという議が起った。そこで一九〇二(明治三五)年四月市内の婦人方の後援を得て、舞鶴座(現在、桜馬場町放射線影響研究所の横にあった劇場)で実演を公開することになった。

ヤング女史は数十名の生徒に運動服を着せて三日間舞鶴座に出張、教師、生徒共そこに泊まり込みで毎日オルガンの伴奏に合わせて、前述の各種の運動や体操を盛んに演じた。これには入場料を徴したが、その収益三百余円は大村活水女園に寄附した。

このことが如何に市民に興味をわかせるか、教育界に刺激を与えたかは想像に難くない。(中略)こういう学校体育は九州で初めてのことであったとアシュボー女史はその『英文五〇年史』の中で記し、(後略)<sup>36)</sup>」とある。

舞鶴座で三日間実演を公開し、その収益三百余円を大村活水女園に寄附したということである。今

回、その裏付けとなる新聞記事を発掘し、百年史に引用されている『英文五〇年史』を確認した<sup>37)</sup>。しかし、「全市の教育界の評判となり」、「このことが如何に市民に興味をわかせるか、教育界に刺激を与えたかは想像に難くない。」との記述を裏付けるための長崎市の教育関係、郷土関係の史料は見出せない。

### ②英文五〇年史

活水学院五〇年史は英文と日本語で1929(昭和4)年に作られ、英文で作られた方を『英文五〇年史』と呼び、百年史でしばしば引用している。

『英文五〇年史』は活水学院資料室整理番号9-5で、資料室にはコピーのみ同番号で2冊保存している。1冊は岩崎やす先生より寄贈されたもので、その書き付けはコピーなので、当初は原本があったと思われる。1冊は「一九八一年二月二十五日福岡女学院ハウエル先生寄贈」のものである。『英文五〇年史』の著者は1908(明治41)年10月29日に来日し、音楽科を担当したアデラ・マーガレット・アシュボー(Miss Adella M. Ashbaugh)であるが、著者名等の記載はない。表紙上部にKWASSUI JO GAKKO 1879-1929とあり、中央にWOMANS FOREIGN MISSIONARY SOCIETY METHODIST EPISCOPAL CULTUREの模様がある。横12.8センチ、縦17.7センチ、文章20ページ、写真その他で12ページのものである。体育に関する記述は「ACTIVITIES」のなかの「Athletic Association」の項に下記のように記述されている。

「Kwassui was the first Girl's School in Kyushu to introduce Physical Training. Until the arrival of Miss Mariana Young in 1897 nothing had been done to develop stronger bodies. Miss Young started Physical Culture classes, and gave public exhibitions that awakened great interest. The first was given in Kwassui Chapel in 1899. The proceeds netted enough to provide Gymsuits. In May of 1902 a big exhibition, a Benefit for the Kwassui Girl's Home, was held in a big theatre before an audience of 3500 people, the Governor's wife being one of the patrons. Miss Young held her classes in the Kindergarten, but they soon outgrew that room. In 1906, a Gymnasium was built. There is a vast difference between the sturdy looking girls that

come into the High schools today after having Physical Training throughout their Primary Course , and those delicate appearing , narrow-chested girls of thirty years ago . Since 1915 Kwassui has had a strong , well managed Athletic Association . We have a well equipped Gymnasium and Play Ground , and in all Girl's School in Japan , Physical Training is required.<sup>38)</sup>」

和訳すると次のようになる。( )内に体育に関する英文原文を記載した。

「活水は九州で体育 (Physical Training) を導入した最初の女学校である。1897年にマリアナ・ヤングが来るまでは強い身体を発達させるためのものは何もしていなかった。マリアナ・ヤングは体育の授業 (Physical Culture classes) を始め、大きな関心をもたらした公開演技 (public exhibitions) を催した。最初は1899年に活水のチャペルで行われた。体操服 (Gymsuits) を用意するための十分な純益をもたらした。1902年の5月には県知事夫人がパトロンの一人で、活水女園のための慈善の大きな公開演技が、大きな劇場で3500人の観衆の前で行われた。ミス・ヤングは彼女の授業を幼稚園でしていたが、すぐに部屋を大きくした。1906年に体育館 (Gymnasium) が建てられた。初等科を通じて体育 (Physical Training) をしたあと、高校に入学する現在のたくましく見える少女と、30年前のか弱く見える細い胸の少女との間には大きな違いがある。1915年から活水は強い、良く管理された運動組織 (Athletic Association) を持つ。私たちは良く設備された体育館 (Gymnasium) と運動場 (Play Ground) を持つ、そして日本の全ての女学校で体育 (Physical Training) は必要である。」

マリアナ・ヤングが体育の授業を始め、公開演技を催した。活水のチャペルで行われた1899年の公開演技でも、体操服を用意するための十分な純益をもたらしたとある。活水女園のための慈善公開演技が、3500人の観衆の前で行われた。この文では、当時のアメリカでの表記により、体育をPhysical TrainingとPhysical Cultureで表記している。次の2カ所は誤記あるいは問題である。1点目は1902年の5月との記述は4月の誤りである。他の学校史の

記述は4月になっており、次項に示す新聞記事も4月である。2点目は3500人という観衆の数である。

### ③慈善音楽体操会

以上のこと以外は不明であったが、新たに発掘した当時の新聞で、開催予定の「慈善音楽体操会」の内容が明らかとなった。図1は鎮西日報明治三十五年四月二十四日第7060号(三)雑報の記事<sup>39)</sup>である。読みにくいので、本研究者が書き写したものが図2である。図3が東洋日の出新聞明治三十五年四月廿四日「慈善音楽体操会」広告<sup>40)</sup>である。しかし、この記事、広告とも開催前に書かれたものであり、実際に開催した後の報告や感想等を述べた記事は今のところ見いだせない。この新聞記事と広告により有料公開とは「慈善音楽体操会」であったこと、後援者名、「入場料」の名目と金額、公開された体操の内容、出演者が新たに明らかとなった。学校史の記述が確認された点も問題となって残された点もある。

記事と広告をもとに順に検討する。従来は体操が有料公開されたと言われていたが、「慈善音楽体操会」であり音楽8演目、体操11演目で、体操のみではなかった。記事からは、この会の主たる目的は慈善のためとみることができる。そのために体操が公開されたのであろうが、音楽も演目にあった。

音楽は奏楽7演目と唱歌1演目であった。曲目は最初の奏楽の「君が代」のみ記してある。奏楽は長崎音楽会楽隊が4演目、外国人3人(フロレンス、ハリス マーガレット、ウオーカー グレース、バクスター)によるピアノ合奏が1演目、外国人2人(ヴィクトル、ピー、マルチン フロレンス、ハリス)によるマンダリンピアノ合奏が1演目、外国人1人(キティー、ウオーカー)によるヴァイオリンが1演目であった。唱歌1演目は活水の卒業生2人(岡島マサ 柴田コマ)によるものであった。活水女学校には音楽科があり、音楽を重視していたが、外国人6人の名前は外国人宣教師の中に見出せない。活水の音楽科は1989(明治32)年に音楽担当宣教師が転任後、在留外国人に頼み授業を担当していた時期がある。6人も在留外国人ではないかと思われるが、今後明らかしていきたい。唱歌に出演した卒業生、岡島マ

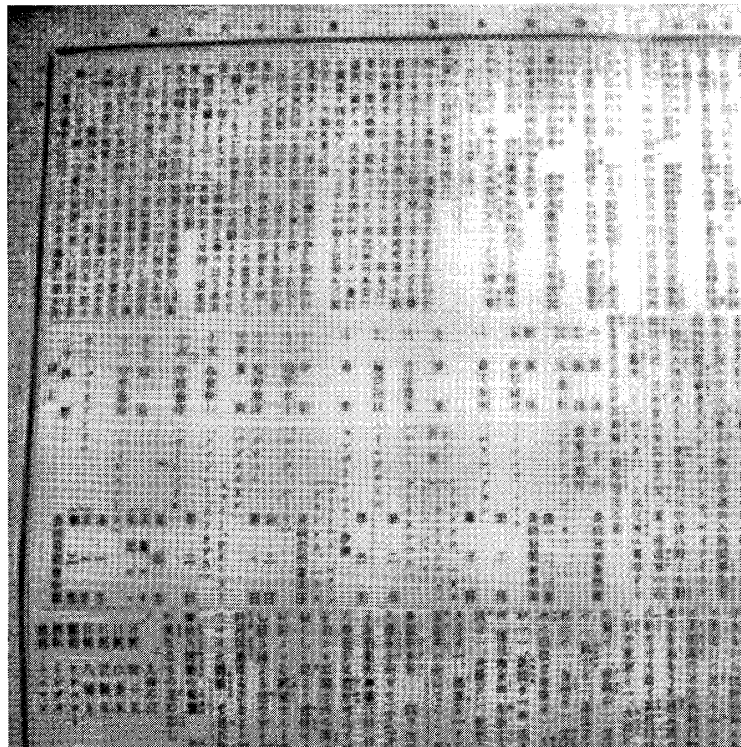


図1「慈善音楽体操会」開催記事 鎮西日報 明治三十五年四月廿四日第7060号(三)雑報

鎮西日報明治三十五年四月二十四日 第七千六十号(三)

●慈善音楽体操會 活水女學校の「ラッセル」女史は數年前より福岡縣に一の孤兒院を設立して専ら孤女の教育に従事しつゝあるが其の經費を扶助せんが爲め荒川知事夫人横山市長夫人馬淵書記官夫人矢野榎事長夫人、ジュリ、アリス、ルイフォスタ、諸夫人發起人となり來る廿六日午後六時より舞鶴座において慈善音楽体操會を催し廣く慈善家の義捐金を募集しその收入を以て右孤兒院寄贈する

一 奏樂 君が代 長崎音樂會樂隊  
 二 演說 開會の趣旨  
 三 大進行 (グラランド、マーチ) 第一、二、三部 長崎音樂會樂隊  
 四 奏樂 蜜柑競走 (オレンザ、レース) 第三部  
 五 長竿操練 (ボール、ドリル) 第三部  
 六 奏樂 ビアノ (フロレンス、ハリス) 第三部  
 七 自由體操 (フリー、ヂムナスチック) 第二部  
 八 輪環操練 (リングドリル) 第二部  
 九 奏樂 マンダリンピアノ合奏 (ヴァイタル、ビー、マルチン) 第三部  
 十 奏樂 フロレンス、ハリス 長崎音樂會樂隊  
 十一 奏樂 (エッグ、レース) 第二部  
 十二 鶏卵競走 (ダンベル) 第二部  
 十三 奏樂 (ヴァイオリン) キテイ、ウオーカー 第一部  
 十四 假裝步行 (ファンシー、ステップス) 第二部  
 十五 手球操練 (ボールドリル) 第三部  
 十六 唱歌 柴田コマサ 第三部  
 十七 八字形操練 (フィギュアリス) 第一部  
 十八 パーカーカッション 第二部  
 十九 奏樂 長崎音樂會樂隊  
 二十 奏樂 以上

図2 筆写した「慈善音楽体操会」開催記事 (横線を付した文字は本来は旧字体) 鎮西日報 明治三十五年四月廿四日第7060号(三)雑報



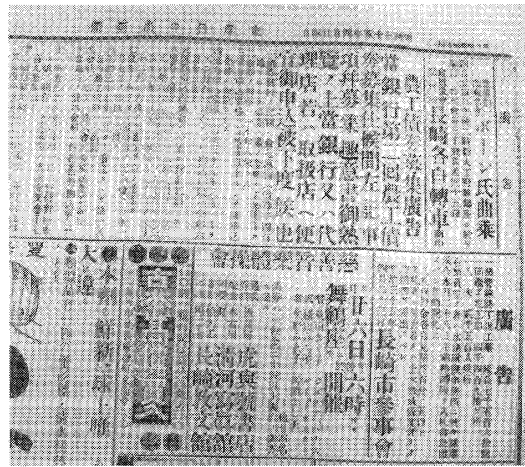


図3 「慈善音楽体操会」広告 東洋日の出新聞 明治三十五年四月廿四日

サは明治34年(第8回)高等科卒業生で当時教員をしていた。柴田コマは明治35年(第9回)高等科卒業生で、9月から教員になるところであった。

この実演の公開は百年史にあるように孤児院の経費を扶助するための慈善事業であった。慈善事業はキリスト教の布教のなかで、宣教師の任務であった。

百年史にある「市内の婦人方の後援を得て」、英文五〇年史の「県知事夫人がパトロンの一」は確認された。後援発起人は荒川県知事夫人、横山市長夫人、馬淵書記官夫人、矢野検事長夫人と外国人夫人の他24名であったことがわかった。キリスト教慈善事業同様、上流夫人による慈善活動であった。

百年史にある「入場料を徴した」は義捐金であり、30銭以上で入場券が与えられたことがわかった。

体操の出演者は活水の女生徒との記述はないが、活水のラッセル女史が設立した孤児院の経費を扶助するためという記述があることから、活水の女生徒に違いない。第一部、第二部、第三部は生徒のグループ分けであろう。活水では1887(明治20)年4月に「科目を大別して三部とす」とし、「邦学部、英学部、技芸部」に分け、その後改訂されるがこの三部の使用が残っていたのであろう。

体操の内容を演目順に整理する。

- |    |                   |             |
|----|-------------------|-------------|
| 三  | 大進行(グランド、マーチ)     | 第一、二、三部     |
| 五  | 蜜柑競走(オレンジ、レース)    | 第三部         |
| 六  | 長竿操練(ポール、ドリル)     | 第三部         |
| 八  | 自由体操(フリー、ヂムナスチック) | 第二部         |
| 九  | 輪環操練(リングドリル)      | 第三部         |
| 十二 | 鶏卵競走(エッグ、レース)     | 第二部         |
| 十三 | 啞鈴操練(ダンベル)        | 第一部         |
| 十五 | 假装歩行(ファンシー、ステップス) | 第二部         |
| 十六 | 手球操練(ボール、ドリル)     | 第三部         |
| 十八 | 字形操練(フィギュアース)     | 第一部         |
| 十九 | パーカッション           | {第一部<br>第二部 |

体操の名前の和訳は学校によるのか、新聞社によるのかは不明であるが、当時の一般的和訳と異なるものもある。

全体の概念を体操としており、その中に、進行(マーチ)、競走(レース)、操練(ドリル)、体操(ヂムナスチック)、歩行(ステップス)、パーカッションがある。当時アメリカから日本に導入されていた普通体操が中心となっている。

これらの体操のうち二つは、活水学院所蔵写真で確認できる。「大進行(グランド、マーチ・grand

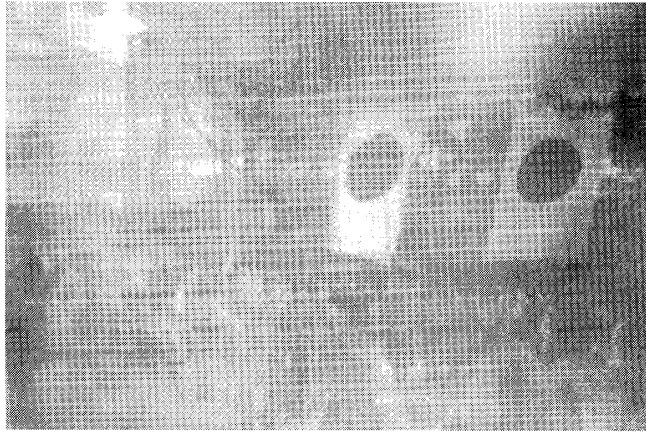


図4 体操服で行進する活水女学校生徒（活水学院資料室資料番号2-1-(3)-10-1）

写真には「ヤング先生の新式体操大演習会 カウエンチャペルで開催その時の生徒は新しい体操服着用昭和32年（1899）4月22日夕」と記載されている。

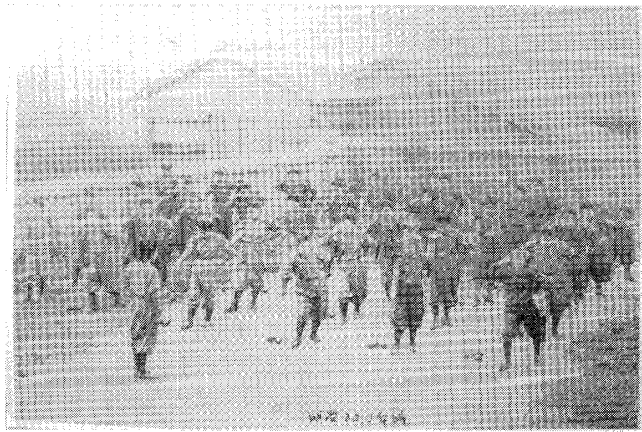


図5 ダンベルを足下に置き、体操をする活水女学校生徒（活水学院資料室資料番号2-1-(3)-13）

写真には「ヤング校長時代の新式体操（新式体操服を着用して）明治32、3年頃」と記載されている。『活水75年の歩み』頁付けなし、『活水学院百年史』70頁に掲載されている。

march)」は行進である。図4はこの時のものではないが、活水学院資料室所蔵の行進の写真である。写真には「ヤング先生の新式体操大演習会カウエンチャペルで開催その時の生徒は新しい体操服着用昭和32年（1899）4月22日夕」と記載されている。

「啞鈴操練（ダンベル・dumbbell）」はリーランドが日本に導入した普通体操の一つで、当時一般的には啞鈴体操と訳されていたものである。図5はダンベル

を足下に置き、体操をする活水女学校生徒である。写真には「ヤング校長時代の新式体操（新式体操服を着用して）明治32、3年頃」と記載されている。『活水75年の歩み』、『活水学院百年史』にも掲載されている。

長竿操練（ポール、ドリル・pole drill）は棒を持つての体操であるが、棒体操かワズ体操かは確認できない。輪環操練（リングドリル・ring drill）は普

通体操の木環体操であろう。

パーカッションはここでは和訳されていないが、『百年史』では筋肉緊張運動<sup>41)</sup>と訳している。パーカッション、蜜柑競走(オレンジ、レース・orange race)、鶏卵競走(エッグ、レース・egg race)、手球操練(ボール、ドリル・ball drill)、自由体操(フリー、ヂムナスチック・free gymnastics)、假装歩行(ファンシー、ステップス・fancy steps)、字形操練(フィギュアース・figures)の内容は今後確認したい。

官の立場でリーランドにより1878(明治11)年にアメリカから導入された普通体操は、当時学校体操の中心であった。1901(明治34年)の高等女学校令施行規則では高等女学校の体操は「普通体操と遊戯」で、普通体操では「矯正術、徒手体操、巫鈴体操を授け、又便宜球竿体操および豆囊体操を授くべし」としていた。民の立場のマリアナ・ヤングも、オハイオ・ウエスレアン大学等アメリカで受けた教育の中で学んだものを導入したのであろう。

図6は明治35年4月17日東洋日の出新聞「慈善音楽幼燈会」広告<sup>42)</sup>である。長崎孤児院が、19日と20日午後2時から舞鶴座で「慈善音楽幼燈会」を開催し、通券は30銭以上の義捐金の方へ1枚とある。さらに図7は明治35年5月1日の東洋日の出新聞

「慈善演芸会」広告<sup>43)</sup>である。広告には長崎慈善会が、24日と25日午後1時から舞鶴座で「慈善演芸会」を開催し、通券は30銭以上の寄附の方へ呈すとある。このように、当時舞鶴座では慈善と銘打った会が行われ、通券で30銭が相場であったようである。慈善ではない歌舞伎は少々高く、明治40年の尾上梅幸ら東京若手歌舞伎一座公演は、等一円36銭より4等35銭までであった。「慈善音楽幼燈会」と「慈善演芸会」は二日間開催すると広告し、通券で30銭以上であるが、「慈善音楽体操会」は26日午後6時よりとだけある。

舞鶴座は、「明治23年10月21日開業 建坪本屋340坪<sup>44)</sup>」、「石田県令の薦めで、県の応援で地方には珍しい大劇場舞鶴座建設の発起をした。市中の名士を網羅した会社組織で始めたが、事情あって自己の所有とした。<sup>45)</sup>」というものであった。「文化輸入の門戸である長崎に、外国人でも十分鑑賞できる完全な劇場を<sup>46)</sup>」という目的であった。収容力は「2296人<sup>47)</sup>」であった。

百年史には3日間開催とあるが、新聞記事、広告に27、28日が記載されていない。英文五〇年史には観衆3500人とあるが舞鶴座の収容人数は2296人であり、実際の観衆数は何人であるのか。百年



図6 「慈善音楽幼燈会」広告  
東洋日の出新聞 明治三十五年四月十七日



図7 「慈善演芸会」広告  
東洋日の出新聞 明治三十五年五月一日

史には収益三百余円とある。一人30銭で1000人分に相当する額である。必要経費を除いているのであろう。

開催日数、観衆数、開催後の新聞記事の収集、体操の内容を明らかにすることが課題として残された。

## まとめ

活水女学校第二代校長マリアナ・ヤングは、1897(明治30)年に来日し、生徒に体操を指導し運動服を導入し、体操を公開した。1902(明治35)年4月26日の舞鶴座での体操の有料公開は、単に入場料を取るのではなく、キリスト教慈善事業で義捐金として寄附を募るものであった。「慈善音楽体操会」として市内の上流夫人の支援で行われた。体操と音楽が行われ、活水女学校生による体操は行進、競走、手具体操、体操、パーカッション等が運動服で演技された。音楽は活水女学校卒業生が唱歌のみに出演し、他は長崎音楽会楽隊と外国人によるピアノ合奏、マンダリンピアノ合奏、ヴァイオリンであった。活水女学校の外国人女性宣教師、日本人上流夫人、在留外国人等は密接に連携し、慈善事業をしていたことがわかる。収益金は孤児院に寄附された。

マリアナ・ヤング指導の活水女学生による米国の体操が「新式体操」として多くの市民に知らされた。ミッション・スクールの外国人女性宣教師が日本の女学生の体育奨励の役割を果たしたこと、体操の内容が一部明らかとなった。しかし、開催後の記事の収集、日程や観衆数、当時の各種慈善会の実際、指導された体操のアメリカ側史料収集、音楽に出演した外国人の確認等多くの課題が残された。今後はこれらの課題を解明することにより、明治期ミッション・スクールの外国人女性宣教師の体育指導を明らかにしていきたい。

## 謝辞

史料収集にあたりお世話になりました活水学院資

料室、活水女子大学附属図書館の皆様にご感謝申し上げます。

## 注

- 1) 岸野雄三・竹之下休蔵、近代日本学校体育史、東洋館出版、1959. p.42
- 2) 岸野雄三、「女子体育に尽くした人たち(一)」子供と女子の体育、2巻5号、1960. pp.10-14
- 3) 秦芳江、「明治期におけるキリスト教主義女子体育について」同志社女子大学学術研究年報、15号、1964.
- 4) 秦芳江、「明治期キリスト教主義教育と体育—近代日本の体育思想—14—」体育の科学、15巻6号、1965. pp.344-349
- 5) 秦芳江、「同志社女子部の正課体育と課外体育の歴史(明治篇)」同志社女子大学学術研究年報、35巻3号、1984. pp.18-42
- 6) 掛水通子、「明治期における私立女学校、高等女学校の体育指導者について」、東京女子体育大学紀要17号、1982. pp.1-10
- 7) 掛水通子、「女子体育の創始者たち」岸野雄三編、体育史講義、1984. p.212-216
- 8) 掛水通子、「日本の女性のスポーツと教育」成田十次郎編、スポーツと教育の歴史、1988. p.97
- 9) 掛水通子、前掲書6)、p.2
- 10) 掛水通子、前掲書7)、p.213
- 11) 北陸学院、北陸学院八十年史、1961. p.24
- 12) 函館白百合学園、百周年記念誌、1978. p.25
- 13) 本稿では、woman、femaleを意味する語として「女性」を用いた。しかし、その時代に「婦人」が用いられていた場合や引用文等では、そのまま「婦人」を用いた。
- 14) 小桧山ルイ、婦人宣教師の女子教育事業—その伝道事業における位置づけと成功の要因—、キリスト教史学、48号、1994. p.72(この論文の著者名は小檜山ではなく、小桧山と表記してあるので、そのまま用いた。)
- 15) 小桧山ルイ、前掲書14)、p.72

- 16) 小桧山ルイ、前掲書14)、p.74
- 17) 小桧山ルイ、アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響、東京大学出版会、1992. Pp.345
- 18) 宮地ひとみ、「大阪ステーションの自給と女性宣教師の役割—地域社会との関わりを中心に」、同志社大学人文科学研究所編、アメリカン・ボード宣教師—神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1800~1890、教文館、2004. pp.169-200
- 19) 宮地ひとみ、前掲書18)、p.181
- 20) 宮地ひとみ、前掲書18)、p.182
- 21) 活水学院編、活水学院五十年史、活水学院、1929、p.44
- 22) 活水学院百年史編集委員会編、活水学院百年史、活水学院、1980、pp.58-59 pp.168-172
- 23) 活水学院百年史編集委員会編、前掲書22) p.24
- 24) 活水学院百年史編集委員会編、前掲書22) p.29
- 25) 1887(明治20)年4月長崎活水女学校規則
- 26) 1901(明治34)年7月活水女学校規則
- 27) 1907(明治40)年7月私立活水女学校規則並ニ幼稚科保育規程
- 28) 1887(明治20)年4月長崎活水女学校規則
- 29) 活水学院百年史編集委員会編、前掲書22)、p.68
- 30) 1887(明治20)年4月長崎活水女学校規則
- 31) 機械と書いてあるが、器械のことと思われる。
- 32) オハイオ・ウエスレアン大学ホームページ  
Ohio Wesleyan University History  
<http://www.owu.edu/about.html#history>  
(2006年8月6日検索)
- 33) 活水学院編、前掲書21)、p.48
- 34) 学校法人活水学院、活水75年の歩み、1954年、p.13
- 35) 活水学院百年史編集委員会編、前掲書22)、p.68
- 36) 活水学院百年史編集委員会編、前掲書22)、p.69-70
- 37) 2006(平成18)年2月13日から15日に活水学院資料室資料を活水女子大学図書館にて調査した。
- 38) KWASSUI JO GAKKO 1879-1929 p.13
- 39) 鎮西日報明治三十五年四月二十四日
- 40) 東洋日の出新聞明治三十五年四月廿四日
- 41) 活水学院百年史編集委員会編、前掲書22)、p.68
- 42) 東洋日の出新聞 明治三十五年四月十七日
- 43) 東洋日の出新聞 明治三十五年五月一日
- 44) 帯谷重則、帯谷宗七伝、帯谷重則、1999 p.56
- 45) 帯谷重則、前掲書44)、p.152
- 46) 長崎市小学校職員会編、明治維新以後の長崎(復刻版)、名著出版、1973. p.18
- 47) 長崎市小学校職員会編、前掲書46)、p.352